

東洋學報 第八十八卷第三号 平成十八年十二月

論說

金吾衛の職掌とその特質

——行軍制度との關係を中心に——

田頭 賢太朗

はじめに

本稿は、唐の衛府制度である十二衛（左右衛・左右驍衛・左右武衛・左右威衛・左右領軍衛・左右金吾衛）の一つ、金吾衛を取り上げ、その特質について考察を加える。

周知のように、唐の府兵制では、各地に設置された折衝府（軍府）を通じて、兵士の徴兵・訓練・動員が行われた。各折衝府は中央の十二衛に分属しており、十二衛は管轄下の折衝府より番上してくる府兵（＝衛士）^{（1）}を率いて、皇帝の警衛等に当たったのである。

国家や権力の特質について論ずる場合、時代・地域を問わず軍事制度に関する問題は避けては通れず、府兵制に

ついても、既に古典的な業績ともいえる浜口重国氏の諸論考をはじめとして、多くの研究が積み重ねられている。⁽²⁾とりわけ近年では、氣賀澤保規氏が、通説である府兵の兵民一致論に対して、兵民分離論を提起するなど、府兵制を巡る議論は活況を呈しており、府兵制研究は新たな局面を迎えているといつてよいだろう。⁽³⁾

しかし、氣賀澤氏も含めた従来の研究の関心は、主として地方に置かれた折衝府（軍府）と府兵兵士を巡る問題に集中しており、中央の衛府制度を正面から扱った研究はほとんど見受けられない。衛府制度に触れる場合にも、『唐六典』の記述がほぼそのまま引かれるに止まっているようである。⁽⁴⁾

こうした研究状況の背景には、衛府については一応『唐六典』の記述に尽くされているという認識と並んで、西域出土文書による研究の隆盛がある。特に府兵制研究に貴重な材料を提供してくれる史料として、所謂「蒲昌府文書」⁽⁵⁾の存在が大きい。吐魯番出土のこの文書は、西州に置かれた折衝府（蒲昌府）の具体的な活動の実態を生きたと示してくれたわけだが、蒲昌府所属の府兵は、名称こそ衛士と呼ばれていたものの、その活動に中央の衛府への上番任務は全く見られなかった。⁽⁶⁾この事実から、西州のような辺境地帯の折衝府では衛士上番は建前で、実態は軍府周辺での活動が主であった、ということが強調されたのである。こうした西域出土文書を主材料とした府兵制研究にあつては、当然ながら中央の衛府に対する関心は希薄とならざるを得ない。

しかし、軍事学の基本的な視角として「軍隊がどのような構成をとるかは、一つには、それが奉仕する政治目的によつて、一つには、それがどのような徴集方式をとるかによつて決定される」⁽⁷⁾のであつて、唐の支配者層が、府兵の基本的な任務を衛府への衛士上番として設定した以上、その衛府制度の分析なくして、府兵制の全体像を把握

することは出来ないのである。

こうした問題意識から、金吾衛を取り上げるわけであるが、十二衛の中で特に金吾衛を選んだ理由は、諸衛の中でも金吾衛の存在は「而して環衛の職、金吾尤も重し」⁽⁸⁾と言われるほどに重要視されており、金吾衛の特質を解明することが唐衛府制度、ひいては府兵制の特質を考える上で大きな鍵となると考えるからである。

以下、本稿では、『通典』を典拠として復元された職員令の職掌規定と、『大唐衛公李靖兵法』（以下『李靖兵法』と略記）逸文や『太白陰経』といった唐代兵書を主な素材とし、金吾衛の職掌と行軍制度との関連性を軸として、金吾衛の特質について論ずることにしたい。

I・通説的見解とその問題点

金吾衛が十二衛の中でも、他の諸衛とは職掌の異なる特殊な衛府であることは従来から指摘されてきた。即ち、『唐六典』卷二四、諸衛、左右衛条に、

左右衛大將軍・將軍の職、宮廷警衛の法令を統領することを掌り、以て其の屬の隊仗を督して、諸曹の職務を總ぶ。（引用史料の傍点は田頭による。以下同じ。）

とあるように、左右衛の主要任務は「宮廷警衛」、つまり宮城内での警衛・宿衛であり、他の諸衛の職掌も左右衛と同じである。⁽⁹⁾これに対し、『唐六典』卷二五、諸衛府、金吾衛条には、

金吾衛大將軍・將軍の職、宮中及び京城晝夜巡警の法を掌り、以て非違を執禦す。

金吾衛の職掌とその特質 田頭

第八十八卷 二七一

とあり、ここに金吾衛の職掌は「宮中及び京城昼夜巡警」であると明快に記されている。この史料を最大の根拠として、金吾衛の主たる職掌は宮城・京城の巡察であり、長安の警察・治安維持機構であることが金吾衛の特質であったとする見解が通説となつて⁽¹⁰⁾いる。

特に、巡察区域が宮城内のみならず、京城にまで及ぶことは金吾衛の特質を顕著に示すものとされ、例えば山田充昭氏は、唐の多数の衛府のうち、金吾衛のみが京城を昼も夜も巡警するのであり、京城昼夜巡察のために金吾衛は設置され、そこにこそ金吾衛の存在意義があつたと述べて⁽¹¹⁾いる。

『唐六典』の記述以外に、通説的見解の根拠として次のようなものがある。

(一)金吾衛の官衛が、皇城内ではなく、京城内に位置していたこと。⁽¹²⁾この事實は、金吾衛の主任務が京城の治安維持であつたことを示す、と理解されて⁽¹³⁾いる。

(二)「金吾衛」という名称が、京師の巡察・治安維持を任務とする漢代の「執金吾」⁽¹⁴⁾に由来すると考えられること。

(三)金吾衛の配下に「左右街使」が設置されていたこと。⁽¹⁵⁾左右街使は長安の左右六街を巡察する職である。⁽¹⁶⁾その精確な設置年代は不明であるが、少なくとも開元二十五年(七三七)以前には設置されて⁽¹⁷⁾いた。

以上のような根拠に加え、正史等にも金吾衛による宮城・京城の巡察や治安維持活動の事例は数多く見られる。

例えば、『旧唐書』卷一八五上、良吏上、田仁会伝には、

麟德二年(六六五)、右金吾將軍に轉ず。……仁會、強力に惡を疾み、晝夜巡警し、宮城自り衢路に至る。

とあり、右金吾將軍田仁会が宮城から京城衢路に至るまでを巡察している。或いは、『資治通鑑』卷二三九、元和

十年（八一五）六月癸卯条には、

賊、紙を金吾及び府縣に遺して曰く、急ぎ我を捕らえること母れ。我、先づ汝を殺さん、と。故に捕賊者、敢へて甚だ急がず。

とある。これは、長安の靖安坊東門にて武元衡を殺害した賊が、金吾衛および京兆府・万年県・長安県に対し、脅迫文を書き残したという記事である。この脅迫文は「捕賊者」に宛てられたものであり、金吾衛が京兆府・長安県・万年県といった行政機関と共に京城内の「捕賊」を担当していたことがわかる。⁽¹⁸⁾

このように見てくると、金吾衛に関する通説的見解は非常に説得的である。それでは、通説的見解に問題点はないのだろうか。それを指摘する前に、本稿の主張とも関連する楊鴻年氏の論に触れておきたい。楊氏は、都城での任務と並んで、行幸時における先駆や隊列の統制が、金吾衛の主任務の一つであることを指摘している。⁽¹⁹⁾ また、京城の街路の管理機構としての金吾衛・左右街使の活動が、府・州や節度使下に設置された「虞候」という職と類似していることを指摘している。⁽²⁰⁾

こうした楊氏の指摘は、金吾衛について、長安の治安警察機構としての性格以外の側面に注意を向けたという点で重要である。また、金吾衛の特質を考えるうえで、「行幸時の任務」と、「虞候との類似性」を重視する視角に関して、本稿は楊氏の所説より示唆を受けている。但し、その一方で、楊氏の論には次のような問題点が存在する。

第一に、行幸時の任務については、都城での任務と並列するだけで、任務相互の関係や、任務全体の基底にある金吾衛の特質について言及していない。

第二に、虞候との類似性については、京城街路を管理する「街官」としての金吾衛と、府・州や節度使下の治安維持機構としての虞候とを比較したもので、金吾衛と虞候の職掌比較としては極めて部分的なものに留まっている。また、金吾衛を長安の治安維持機構と捉えている点では通説と変わりない。

これを要するに、楊氏の金吾衛の特質に関する所説は、独自の見解を打ち出すには到っておらず、通説的見解の範疇に属するものといえる。

さて、ここで改めて通説的見解の問題点についてであるが、実は、楊氏も含めた通説的見解には、大きな盲点がある。即ち、通説的見解は主に『唐六典』の記述に依拠しているが、それと並ぶ基本的な史料である『通典』の記述は、金吾衛の職掌に関して『唐六典』とは大きく相違しているのである。それにも拘らず、従来の研究は『通典』の記述にほとんど検討を加えていない。この点で従来の研究は片手落ちと言うほかないのである。そこで『通典』卷二八、職官一〇、金吾衛条を掲げよう。

……隋、左右武侯府大將軍一人、將軍三人を置く。車駕出入、先驅後殿、晝巡夜察、執捕姦非、烽候、道路、水草の宜しき所を掌り、巡狩・師田、則ち其の營禁を掌る。煬帝大業三年、改めて左右武侯衛と爲し、領する所の軍士は炊飛と名づく。(注省略) 大唐の初め、又た、左右武侯府と爲す。龍朔二年、改めて左右金吾衛と爲し、大將軍一人を置く。掌る所、隋と同じ。將軍二人其の事に副ふ。(注省略)

右の史料は本稿の中核となるので、その内容を整理・確認しておく。

(一)隋では左右武侯府大將軍一人、將軍三人を置いた。

(二)その職掌は、車駕出入時の先驅後殿、昼夜の巡察、姦非の捕捉、烽候、道路、水草の管理⁽²¹⁾であり、また巡狩・師田において、御營の警衛を統括した。

(三)大業三年(六〇七)に、左右候衛と改称し、⁽²²⁾所属の衛士を「伙飛」と称した。

(四)唐初、再び左右武侯府とした。

(五)龍朔二年(六六二)、左右金吾衛と改称した。大將軍一人を置き、その職掌は隋(武侯府)と同じである。また將軍二人を置き、大將軍を補佐せしめた。

以上から、金吾衛の職掌は隋制の武侯府のそれを継承したものであり、名称も龍朔二年までは隋制の「武侯府」を踏襲していたことがわかる。つまり金吾衛は隋武侯府をほぼそのまま継承して設置された衛府なのである。

右の『通典』の記述を典拠として、『唐令拾遺補』衛府職員令では、金吾衛の職掌規定が次のように復元されている。⁽²³⁾

掌車駕出入、先驅後殿、晝巡夜察、執捕姦非、烽候、道路、水草所宜、巡狩・師田、則掌其營禁。

一般に、『通典』所引の唐令は開元二十五年令と推定されているが、⁽²⁴⁾右の職掌規定は隋制を継承したものであるから、唐朝初期の武徳令から一貫して同様の職掌規定が存在したと考えられる。また、右の職掌規定には「宮城」や「京城」といった、長安での治安警察活動を示す字句が存在しない。このことは、『唐六典』の記述に依拠して長安の巡察・治安維持の面のみで、金吾衛の職掌の特質を代表させる通説的見解の見直しを迫るものである。

従って、『通典』より復元される職員令の職掌規定こそ、金吾衛の特質を考える上で最も基本的な材料であり、

金吾衛の特質は、この職掌規定に即して理解しなければならないのである。そこで、改めて金吾衛の職掌を整理・列挙すれば次のようになる。

- (a) 車駕出入、先駆後殿
- (b) 昼巡夜察、執捕姦非
- (c) 烽候
- (d) 道路
- (e) 水草所宜
- (f) 巡狩・師田、則掌其營禁

これらの職掌から金吾衛の特質を理解する上で留意すべきことは、職掌の筆頭に「車駕出入、先駆後殿」が挙げられていることである。つまり、金吾衛にとつて、車駕出入時の先駆後殿こそ最重要の職掌であったのである。⁽²⁵⁾このことは、金吾衛の職掌の特色として車駕出入時、即ち行幸・親征との関連性が重要ではないかという推測に導く。一般論として、全軍の先頭に位置する部隊（先駆）は、索敵・偵察・警戒を担当し、進路の安全を確保する。また、最後尾に位置する部隊（後殿）は、敵軍の追撃を受けた場合に、踏み止まって迎撃し、本軍退却の時間を稼ぐ任務を負う。部隊の編成・配置の上で、先駆後殿の役割は極めて重要なのである。⁽²⁶⁾

こうした先駆後殿の重要性は唐代の軍事制度でも同様であり、唐代の代表的な兵書である『太白陰経』⁽²⁷⁾卷五、前茅後殿篇第五七は次のように述べている。

……今、先鋒を以て、先んじて井泉、水草、宿止、賊路を探り、郷導と計會せしめ、乃ち進軍す。戦ふに則ち喝後すること有り、皆白刃を抜き、以て之に臨みて、進ましめ、如し退却すれば便ち斬す。敵來りて我を追せば、則ち後殿、これと戦ひ、大軍に驚擾すること無きなり。

本篇目は「前茅後殿」部隊、つまり先頭・最後尾の部隊の役割について述べたものである。これによれば、唐代行軍制度では、先頭部隊は郷導（道案内）と協力して軍隊の進路の安全を確保するとともに、「井泉」「水草」「宿止」「賊路」の探索という任務が課せられていた。また、後殿部隊は、敵の追撃に備えるとともに、戦闘時には白刃を執って兵士を督戦する任務を負っていたのである。尚、後で詳述するように、こうした警戒任務自体とそれを担当する役職・部隊を、唐代行軍制度の用語では「虞候（軍）」と称した。

さて、ここで注目すべきは、『太白陰経』における「前茅後殿」部隊の任務と、金吾衛の職掌を比較すると両者には共通項が多いことである。「前茅後殿」は当然、(a)車駕出入、先駆後殿に対応しており、「井泉」「水草」は(e)水草所宜に、「賊路」は(d)道路に対応している。

つまり、金吾衛の職掌は、先駆後殿部隊（＝虞候軍）としての任務によって構成されているのではないだろうか。そこで節を改めて唐代行軍制度における虞候軍について検討を加えることにしよう。

Ⅱ・唐代行軍制度における虞候軍と金吾衛

(1) 唐代の行軍

「行軍」とは実際の軍事行動に際して編成せられる野戦軍組織であり、時に応じて天子が斧鉞（旌節）を授けて大將（行軍大總管、元帥等）を任命し、その下に戦時編成として組織され、事終われば解散復員せしめられた。⁽²⁸⁾ かかる行軍制度は北周において成立し、唐代前期にその完成をみる。⁽²⁹⁾

唐代行軍制度については、『通典』『武経總要』『太平御覽』等に引用されている『李靖兵法』逸文や『太白陰経』に詳細な行軍規定が存在している。菊池英夫氏・孫繼民氏の研究によれば、⁽³¹⁾ 唐代の行軍は、

① 中軍

② 右虞候軍・左虞候軍

③ 右廂第一軍（前軍）・右廂第二軍（右軍）

④ 左廂第一軍（後軍）・左廂第二軍（左軍）

という、七軍編制を標準的なスタイルとし、⁽³²⁾ 最高司令官たる行軍大總管・副總管以下、判官・典等の幕僚、各軍の總管（定員四名。一名が左右虞候軍を、二名が左右廂軍を指揮。）⁽³³⁾・子總管（子將）・押官・隊正・火長に至る各級の指揮官によって統轄される戦闘隊形編成であった。

こうした行軍規定が、唐代行軍制度の実態を反映していることは、吐魯番出土文書や露布等の史料から裏付けら

れる。即ち、吐魯番出土の「唐中軍左虞候帖為処分解射人事」⁽³⁴⁾には、「中軍左虞候」⁽³⁵⁾「大総管堂」といった語の存在が確認されている。また、蘇頌撰「命姚崇等北伐制」⁽³⁶⁾には、「持節靈武道行軍大総管」「中軍副大総管」「左軍副大総管」「右軍副大総管」「前鋒総管」「左虞候総管」「右虞候総管」「行軍総管」「行軍判官」といった行軍の職名が記載されており、樊衡撰「為幽州長史薛楚玉破契丹露布」⁽³⁷⁾にも「行軍虞候総管」の職名が見えている。

以上から、唐代の行軍編成では、虞候軍とそれを率いる虞候総管以下の職を設置するのが原則的な在り方であったことがわかる。

(2) 虞候軍の任務

『李靖兵法』逸文や『太白陰経』には、虞候軍に關しても詳細な規定が存在するが、ここで注目されるのは、そうした虞候軍に關する規定と金吾衛の職掌が、極めてよく対応することである。以下、金吾衛の職掌との対応關係に留意しつつ虞候軍の任務について見ていこう。⁽³⁸⁾

先ず、『通典』卷一五七、兵一〇、下營斥候并防捍及分布陣所引『李靖兵法』より、虞候軍に關する規定を抄出すれば次のようになる。

①諸そ軍馬の行動は、次第を知るを得。出するに、先づ右虞候馬軍、首と爲り、次いで右虞候歩軍、次いで右軍馬軍、次いで右軍歩軍、次いで前軍馬軍、次いで前軍歩軍、次いで中軍馬軍、次いで中軍歩軍、次いで後軍馬軍、次いで後軍歩軍、次いで左軍馬軍、次いで左軍歩軍、其の次左虞候馬軍、次いで左虞候歩軍。

② 右虞候は、既に先發し、營を安んじ、道路を踏行し、泥濁・橋津を修理し、水草を檢校す。

③ 左虞候は、窄路・橋津を排し、後を捍し、闌遣を收拾し、隊仗を排比し、軍次を整齊し、交雜せざらしむ。

④ 若し軍、迴入すれば、先づ左虞候馬軍、次いで左虞候歩軍、次いで左馬軍、次いで左歩軍、其の次第、前に準じて卻轉す。其の虞候軍の職掌は、初發に準じて交換す。

右の諸規定の内容を整理すれば、

(一) 虞候軍は全軍の先頭と最後尾に位置し、先駆後殿を務める部隊である。

(二) 右虞候軍の任務

宿营地の確保、進路の確認、惡路・橋津の補修、水草（飲料水・牧草）の檢校

(三) 左虞候軍の任務

窄路・橋津の整備、背後の防御、闌遣（遺失物）の收拾、隊列の整備・統制

(四) 行軍が進行方向を反転する場合には右虞候軍と左虞候軍の任務を入れ替える。

となる。これらの任務から、虞候軍が先述した『太白陰經』における「前茅後殿」部隊に相当することは明白であり、金吾衛の職掌でいえば(a)先駆後殿、(d)道路、(e)水草所宜に対応している。

次に、『太白陰經』所載の、虞候軍の任務に関する規定を掲げよう。

① 『太白陰經』卷五、定鋪篇第五一

經曰く、毎日戌時、嚴警の鼓角初動し、虞候甲士十二隊を領し、旗幟を建て、號頭を立て、軍營及び城上を

巡す。如し野に在りて、營外を巡するは、更鋪の疏密を定む。坐者、喝して曰く、是れ甚麼の人か、と。巡者答へて曰く、虞候、總管某乙巡す、と。坐、喝して曰く、甚を作すか、と。行、答へて曰く、定鋪なり、と。坐、喝して曰く、是か不是か、と。行、答へて曰く、是なり、と。此くの如き者、三喝三答して、坐、曰く、虞候、總管過ぐ、と。號頭及び坐喝には、聲の雄なる者を用て充つ。

②『太白陰経』卷五、夜号更刻篇第五二

經曰く、夜、號を大將軍處にて取るは、粘藤紙二十四張、十五行、界に印縫し、標軸を安じ、題首に云く、某軍某年某月某日號簿、と。毎日戌時、虞候判官、簿を持して大將軍幕前に於て號を取る。

③『太白陰経』卷五、報平安篇第四九

經曰く、平安を報ずるは、諸營鋪百司、主掌す。皆、五更に入りて、動靜有らば、虞候に報じて知らしむ。左右虞候、早に、大將軍牙前に出でて、帶刀磬折し、大聲に通じて曰く、左右廂兵馬及び倉庫營竝びに平安なり、と。諾して、復た本班に退く。如し盜賊有りて、動靜緊急なれば、即ち具さに其の事を言す。在野の行軍の若きは、即ち行營兵馬及び更鋪竝びに平安なり、と言ふ。

右の①②より、(一)軍營では、戌刻(午後七時～九時頃)より鼓角を合図に嚴戒体勢に入り、虞候總管が甲士部隊を率いて軍營内外を巡察し、(二)夜間巡察に際し、各所に配置してある鋪を通過するために必要な夜号(合言葉)を記す「簿」は、虞候判官が管理する、ということがわかる。つまり軍營の巡察も虞候軍の主要な任務であったのである。これは金吾衛の(b)昼巡夜察、執捕姦非に対応する。

また、③より、虞候総管には軍営内外の状況（「動靜」）を把握し、それを大將軍（行軍大總管）に報告する「報平安」の任務があつたことがわかる。これは、虞候総管が行軍全体の警戒体制を統括する責任を負っていたことを示しており、金吾衛の(f)巡狩・師田、則掌其營禁に対応するものである。

尚、管見の限りでは虞候軍が「烽候」を管掌することを直接的に示す行軍規定は無いようであるが、虞候軍が烽候と無関係というわけではなかった。

まず、『通典』卷一五七、兵一〇、下營斥候并防捍及分布陣所引『李靖兵法』に、

諸軍馬、擬に停ること三五日、即ち須らく軍を去ること一二百里以來、燿烽を安置すべし。如し動靜有らば、烽を舉げ相報ず。

という規定が存し、軍営周辺には警戒の為に臨時の烽候（燿烽・行烽）が設置された。⁽³⁹⁾ 他方、『太白陰経』卷五、烽燧台篇第四六には、

毎夜、平安ならば一火を舉げ、警を聞かば二火を舉ぐ。煙塵を見れば三火を舉げ、賊を見れば柴籠を燒く。如し早夜、平安火舉がらざれば、即ち烽子、賊の爲に提^{提力}⁽⁴⁰⁾わるなり。

という規定が存在し、烽候では毎夜、異状が無ければ「平安火」と呼ばれる合図を挙げるようになっていた。⁽⁴¹⁾ こうしたルールは行軍作戦中に臨時に設置される行烽の場合も同様であつたろう。虞候総管には大將軍に対し軍営の「平安」を報告する任務があつたから、軍営内外の「動靜」に関する情報は、虞候総管のもとに集約されたに相違なく、その情報源には当然、軍営周辺に設置された烽候（行烽）からの「平安火」等の信号も含まれていたはずで

ある。ここに虞候軍と烽候の任務上の繋がりを見出すことができる。

以上の諸規定から、虞候軍は隊列の統制や警戒体勢を統括する部隊であるといえるが、ここで注目されるのが、『大唐創業起居注』巻一の太原拳兵以前の部分における次の記述である。

帝、其の意を知り、因りて之に謂ひて曰く、突厥の長ずる所、惟、騎射を恃むのみ。利を見れば即ち前み、難を知れば便ち走る。風馳電卷し、其の陳を恆とせず。弓矢を以て爪牙と爲し、甲冑を以て常服と爲す。隊、列行せず、營、定所無し。水草を逐ひて居室を爲し、羊馬を以て軍糧と爲す。勝ちては止まりて財を求め、敗れば慙色無し。警夜巡晝の勞無く、構壘饋糧の費無し。中國の兵行、皆是れに反す。

これは、李淵が隋軍制との比較から突厥の戦術の特徴について述べた言葉であるが、そこでは突厥の特徴として「隊、列行せず」「營、定所無し」「警夜巡晝の勞無し」といった点が挙げられている。このことは、変幻自在の突厥とは逆に、整然とした隊列・軍營を設け、昼夜の警戒を厳重にするのが隋唐の行軍制度の特色であったことを示しているが、そうした特色を支えていたのが「虞候軍」の存在であったのである。

さて、本節での検討から、職員令に規定された金吾衛の職掌が、行軍制度における虞候軍の任務に相当することが明らかである。つまり、金吾衛は、行幸・親征時の御營において虞候軍としての役割を果たすことを第一義的な目的として設置された衛府であり、その本質は「皇帝直属の虞候軍」であるという点に求められるのである。⁽⁴²⁾

Ⅲ・金吾衛と軍令

偵察・警戒と並んで虞候軍の任務の特色として重要なのは、軍中の規律維持、つまり軍令（軍法・軍律）との関わりである。軍営の巡察や隊列の統制を掌る虞候軍の任務は、軍令と不可分の関係にあった。即ち、『通典』卷一四九、兵二、雜教令所引『李靖兵法』所載の軍令中に、「行列斉はず、旌旗正ならず、金革鳴らざれば、之を斬す」とあり、隊列を乱すものは斬刑とされていた。また、先掲『太白陰経』卷五、前茅後殿篇第五七に、「如し退却すれば便ち斬す」とあるように、「前茅後殿部隊」である虞候軍には敵前逃亡者を斬殺する権限が付与されていたが、『李靖兵法』所載の軍令中にも「背軍逃走すれば、之を斬す」との規定がある。

軍令は、最高司令官（行軍大總管・大將軍・元帥）の統帥権・指揮権を具体的に発動させる手段であり、虞候軍の任務は軍令を媒介として行軍の統帥権・指揮権を支えるものであった。この点で唐代行軍制度における虞候軍の持つ意義は極めて大きいと言わねばならない。

とすれば、皇帝直属の虞候軍である金吾衛についても軍令との関わりが想定されるが、そこで注目されるのが、『旧唐書』卷八五、唐紹伝の次の記述である。

先天二年冬、今上、驪山にて講武す。紹、儀注を修するに、旨に合はざるを以て、斬に坐せらる。時に今上、既に講武の儀を失せるを怒り、紹を纛下に坐す。右金吾將軍李邕、遽かに宣勅を請ひ、遂に之を斬す。

これによれば、先天二年（七二三、十二月に開元と改元）の冬、驪山における講武（軍事演習）に際し、唐紹は「講

武の儀を失する」という罪を犯し、右金吾將軍李邕の要請で斬刑に処された。この場合の唐紹の罪が「軍令違反」であったことは、『通典』巻七六、礼三六、軍礼一、出師儀制揚兵講武に、

先天二年十月十三日、驪山の下に講武す。……兵部尚書郭元振、軍容を虧失せるを以て、纛下に坐し、まさに之を斬らんとするに、宰臣劉幽求・張説、馬前に跪き、諫して曰く、元振、上皇を翊戴し、大功を國に有す。軍令に違ふと雖も、刑を加うべからず。伏して寛宥を願ふ、と。乃ち之を捨し、新州に配流す。

とあり、やはり先天二年冬の講武に際し、「軍容を虧失する」罪を犯した郭元振を、宰臣劉幽求等が「軍令に違ふと雖も……」と擁護していることから明らかである。

従つて、唐紹の斬刑が右金吾將軍李邕の要請によつて執行されたということは、金吾衛が軍令の運用・執行に関与していたことを示している。と同時に、金吾衛の職掌が、皇帝の統帥権とも結びついていたことを示しているのである。

IV. 金吾衛の都城巡察

ここまで金吾衛の特質が皇帝直属の虞候軍としての任務にあったことを述べてきた。しかしながら、通説が指摘するように金吾衛が長安の巡察・治安維持を重要な任務としていたこともまた事実である。そこで本節では、金吾衛の虞候軍としての任務と都城巡察との関係について触れることにしたい。

結論からいえば、金吾衛の長安巡察は、軍営における虞候軍としての任務を、長安において行なったものである。

行軍制度の虞候軍は戦時に臨時に編成され、事終われば解散されるのに対し、金吾衛は十二衛の一つとして恒常的に設置されている衛府である。従って、「居りては闌錡に陪り、出でては金輿を導く」⁽⁴³⁾と表現されるように、金吾衛は皇帝が長安に居れば、そのまま長安における虞候軍として活動することになる。これが金吾衛による長安巡察の本質であろう。

ここで強調したいのは、通説のように金吾衛が最初から長安の治安警察機構として設置されたのではなくして、あくまでその本質は車駕出入時における虞候軍としての活動にあり、金吾衛の長安での活動の背景に行軍制度が存在することである。即ち、『新唐書』卷三三上、儀衛志上、衛に、

皇帝、御座に升り、扇開く。左右、扇を留むること各三。左右金吾將軍一人、左右廂内外の平安を奏す。

とあり、金吾衛には出御した皇帝に対し宮内の警衛の状況について報告する「奏平安」の任務があった。これが虞候軍の「報平安」に由来する任務であることは明白であり、金吾衛が、都城においても警衛活動全体を統括する位置にあつて、虞候軍としての役割を果たしていたことを示している。

また、『唐六典』卷二五、諸衛府、金吾衛条に、

凡そ諸衛馬、承直して金吾の巡檢・遊奕に配するは、毎月四十有五匹。

とあり、金吾衛には他衛に比して多数の馬が配備されていた。これは、金吾衛が広く京城全体を巡察するためであると考えられるが、ここで注目したいのは、右史料中の「遊奕（游奕）」の語である。遊奕とは、遊騎を以って探邏し、軍営周辺の警戒網を巡回するもので、⁽⁴⁴⁾行軍制度に由来する用語である。⁽⁴⁵⁾つまり、都城巡察もあくまで軍営巡

察に準ずる任務として認識されていたのである。

以上のように、金吾衛の長安における活動には、行軍制度における虞候軍としての性格が反映されており、従来、金吾衛の特質とされてきた都城巡察も、皇帝直属の虞候軍としての活動の延長線上に位置付けることができるのである。⁽⁴⁶⁾

しかし、北周や隋と比較すれば相対的に極めて安定し、長期に亘った唐代にあつては、長安の都市としての発展と相俟つて、行幸・親征時における活動よりも、むしろ平時の長安での巡察に比重がかかるようになっていったと思われる。その結果、開元年間に編纂された『唐六典』では、金吾衛の職掌として「宮中及京城巡警」が第一に挙げられるようになっていたのであろう。

V・隋武候府・清道率府の検討

本節では、これまでとは違った角度から金吾衛の特質について検討し、本稿の主張を補強することにした。取り上げるのは、隋武候府と清道率府である。既に触れたように、金吾衛の職掌は隋武候府のそれを継承したものであり、名称も龍朔二年までは隋制と同じ「武候府」であつた。従つて、隋武候府について検討することで金吾衛の性格もより明らかになると考えられる。また、清道率府は東宮直属の六率府（左右衛率府・左右司禦率府・左右清道率府）の一つであるが、金吾衛と清道率府との対応関係に着目することで、金吾衛の特質を確認することが出来るはずである。

(1) 隋武侯府の性格

先駆後殿を務めると同時に偵察や警戒を担当する虞候の制度は、既に隋以前の北朝にも存在した。先ず、その事例を挙げてみよう。

①『北齊書』卷一九、莫多婁敬顯伝

（斛律）光、毎に敬顯に前驅を命じ、營壘を安置して、夜中巡察せしめ、或るときは、旦に達るも睡らず。敵に臨んで陳を置くに、亦た、敬顯をして將士を部分せしめ、造次の間、行伍整肅たり。深く光の重んずる所と爲る。位、領軍將軍に至り、恆に虞候事を檢校す。

②『周書』卷二七、韓果伝

果、性强記にして、兼ねて權畧有り。行する所の處、山川の形勢、備へて能く記憶す。兼ねて善く敵の虚實を伺い、情狀を揣知す。……太祖、是れに由り、果を以て虞候都督と爲す。征行に従ふ毎に、常に候騎を領し、晝夜巡察して、畧ば、眠寢せず。

北齊の莫多婁敬顯は「虞候事を檢校」したといい、北周の韓果は「虞候都督」に任ぜられたというが、その任務として前驅、軍營の設置、晝夜の巡察、地形・敵情の偵察、斥候、隊の統制等が挙げられている。これらは唐代行軍制度の虞候軍の任務と合致する。

また、隋代の例では、隋末期ではあるが、『大唐創業起居注』卷三、義寧二年正月条に、李密征討軍編成に際し、屈突通に「行軍左右虞候事」を檢校せしめたという記述がある。

つまり、隋唐以前の北朝諸政権でも、行軍編成には警戒体制を統轄する役職・部署としての「虞候」を設置するのが原則であったのである。これに対し、『隋書』卷二八、百官志下では隋武侯府の職掌について次のように記している。

左右武侯、車駕出づるに、先驅後殿、晝夜巡察、執捕姦非、烽候、道路、水草置く所を掌り、巡狩・師田、則ち其の營禁を掌る。右に加え、司辰師四人、漏刻生一百一十人を置く。

先掲『北齊書』『周書』の記述と右の『隋書』の記述を比較すれば、隋の武侯府の職掌が、先に見た北朝の虞候制度のそれと対応していることは明瞭であろう。特に留意すべきは、隋武侯府の「晝夜巡察」が、北齊虞候の営壘での「夜中巡察」や、北周虞候都督の征行時の「晝夜巡察」に対応していることで、このことから、武侯府の職掌である「晝夜巡察」が都城巡察には限定されず、むしろ、本来的には軍営の巡察を意味するものであったことがわかる。

隋武侯府の具体的な活動の例を示せば、『隋書』卷六五、趙才伝には、右候衛大將軍（大業三年、左右武侯府を左右候衛と改称）の趙才が、巡幸に際し「斥候」や「肅遏姦非」に当たったという記述がある。また、『隋書』卷七〇、李子雄伝には、江都行幸に際し、李子雄が陣列・隊列の統制を保つことで「真の武侯の才」と賞賛され、右武侯大將軍に任ぜられたとの記述がある。

以上のことから、隋武侯府が虞候軍に相当する衛府であったことが明らかであり、金吾衛はかかる隋武侯府の性格・職掌を継承しているのである。⁽⁴⁷⁾

ところで、『資治通鑑』卷二二四、大曆三年（七六八）二月条の胡三省注には、「宇文泰、魏に相たりて、虞候都督を置く。後世之に因り、虞候の官を置く。」とあり、北周の虞候都督は宇文泰の丞相府に設置されていた。⁽⁴⁸⁾丞相府の管轄下には常備軍たる二十四軍が置かれていたから、それが出征する場合に虞候都督が偵察・警戒等の任務に当たったのであろう。

他方、『通典』卷二八、職官一〇、金吾衛条には、「直に後周に至り、武環率・武候率、⁽⁵⁰⁾下大夫各二人を置く。」とあり、既に北周にも武候府が存在したことを伝えている。

北周の武候府は二十四軍系統の統軍衛府であり、武帝が宇文護を誅殺して二十四軍を皇帝直属とした時期に設置されたものと考えられる。⁽⁵¹⁾とすれば、北周の武候府は丞相府の虞候都督の職掌を継承する形で成立したものであり、それが更に隋武候府、唐金吾衛へと継承されたと推測される。

(2) 清道率府と金吾衛

『唐令拾遺補』東宮王府職員令では、『通典』卷三〇、職官一二、清道率府条を典拠として、清道率府の職掌規定が次のように復元されている。

掌斥候道路、先驅後殿、伺察姦非。餘掌同左衛率府。

右の規定から、清道率府の職掌が皇太子出入時に関わる任務であることは明瞭である。⁽⁵²⁾この清道率府の前身は隋の東宮直属の衛府の一つである「虞候府」⁽⁵³⁾であり、唐代にも虞候率府の名称が用いられた時期があった。⁽⁵⁴⁾従って清

道率府（虞候率府）は、まさに皇太子出入時に虞候軍の任務に当たる衛府であるが、それと同時に、こうした清道率府の職は「左右金吾に擬す」⁽⁵⁵⁾とされていた。このことから逆に、金吾衛の特質が清道率府と同様に、皇帝行幸・親征時における虞候軍としての任務にあつたことが確認できる。

尚、敦煌発見の「永徽東宮諸府職員令殘卷」によれば、清道率府（永徽令では虞候率府）の職掌は次のように規定されていた。

掌斥候道路、先驅後殿、察奸非、以下掌同左衛率府。⁽⁵⁶⁾

右の職掌規定は、『通典』に載せられた先掲の職掌規定とほとんど同文である。このことから、金吾衛についても、少なくとも永徽令には、『通典』から復元される職員令の職掌規定とほぼ同文の規定が存在したと考えられる。更にいま一つ注目されるのは、永徽職員令の職掌規定では、清道率府の虞候軍的な性格が明確であるのに対し、『唐六典』卷二八、太子左右衛及諸率府、清道率府条には、

左右清道率府、東宮内外晝夜巡警の法を掌り、以て不虞を戒む。

とあり、清道率府の職掌が「東宮内外晝夜巡警」となっていることである。つまり、清道率府についても、皇太子直属の虞候軍としての職掌から、長安における皇太子居所の巡警へと職務の重点が移っているのであり、これは金吾衛の職掌の比重の変化と対応するものである。

結語

隋唐に至る北朝諸政權では、行軍が編成された場合、警戒・偵察を掌り、軍令を以って軍隊を統制し、秩序を維持する「虞候」という役職乃至部隊が置かれるのが原則であった。金吾衛の職掌は、そうした行軍制度における虞候軍の任務に相当するものであり、「金吾衛の本質は皇帝直属の虞候軍である」というのが本稿の結論である。これによって、金吾衛に関する通説的見解が一面的なものであったことが明らかとなったと思う。

最後に、かかる金吾衛の特質が、衛府制度、府兵制度全体の枠組みの中で有する意義について、以下の四点を指摘して結びとしたい。

第一に、金吾衛が「十二衛」に列せられていることである。つまり、行軍には虞候軍が設置されるという唐代行軍制度の原則からすれば、虞候軍に相当する金吾衛を擁する十二衛全体が、本質的には一個の行軍組織であり、それを長安に固定化したものと捉えることが出来る。⁽⁵⁷⁾

第二には、皇帝と金吾衛との関係である。金吾衛の本質が虞候軍であるということは、皇帝と金吾衛の関係が、行軍における行軍大総管と虞候軍の関係とパラレルであることを意味する。皇帝は受動的に諸衛に守られているのではなく、諸衛は行軍大総管としての皇帝の指揮下に置かれた軍隊なのである。そして、虞候軍たる金吾衛は、諸衛全体の秩序を維持し、統制を保ち、皇帝の指揮権を具体的に発動させる装置として機能するのである。諸衛の中で、金吾衛がとりわけ重視されていたのは、その特質が、皇帝の諸衛に対する指揮権の在り方と密接に関わってい

たからであろう。

更に推測を重ねれば、行軍大総管たる皇帝が居し、虞候軍たる金吾衛が巡察・警戒する、という構造に着目すれば、長安もまた「軍営」と見做すことができる。⁽⁵⁸⁾とすれば、平時の長安にあっても、金吾衛の存在を通じて、戦陣における軍令による統制の原理が、皇帝の統治を背後から支えていたのではあるまいか。⁽⁵⁹⁾

第三に、皇帝と府兵の關係について。十二衛の本質を皇帝指揮下の行軍組織と捉えることが出来るとすれば、折衝府を通じてそれに所属する府兵も本質的には「行軍兵士」として、皇帝の統帥下に置かれていることになる。実際の京師への上番任務の有無とは關係なく、全ての折衝府が中央の衛府の統属下に置かれているのは、こうした皇帝の統帥権が全ての府兵に貫徹されていることの制度的表現ではなかったかと推測される。

第四に、軍事面での制度史的な継承關係について。北朝諸政權の中枢には、宇文泰丞相府の虞候都督―北周武侯府―楊堅丞相府の相府虞候⁽⁶⁰⁾―隋武侯府―唐金吾衛、のように、一貫して虞候軍に相当する機関が設置されていた。こうした「皇帝（丞相）直属の虞候機関」の存在は、皇帝（丞相）が「最高軍事指揮官」としての性格を濃厚に有していたことを示し、⁽⁶¹⁾北朝から隋唐に至る王権の在り方を特徴付けるものといつてよいであろう。⁽⁶²⁾

註

(1) 唐衛府制度の概略については、浜口重国「府兵制度より新兵制へ」〔秦漢隋唐史の研究〕上巻、東京大学出版会、

一九六六年、初出一九三〇年）を参照。尚、本稿では、十二衛以外の衛府（左右監門衛・左右千牛衛）については触れない。

- (2) 府兵制研究史については、氣賀澤保規「前期府兵制研究序説」『府兵制の研究』同朋舎、一九九九年、初出一九九三年）を参照。
- (3) 氣賀澤保規「府兵制史再論―府兵と軍府の位置づけをめぐる―」（註（2）氣賀澤著書、一九九九年）に、氣賀澤氏の府兵制論の要点がまとめられている。
- (4) 例えば、王永興「唐代前期軍事史略論稿」（昆侖出版社、二〇〇三年）第二、三章でも、衛府制度に関しては『唐六典』を引用・紹介するのみである。
- (5) 陳国燦・劉永增編『日本寧楽美術館所蔵 吐魯番文書』（文物出版社、一九九七年）に写真版・録文が収録されている。また、陳国燦「遼寧省檔案館藏吐魯番文書考釈」『魏晉南北朝隋唐史料』一八、二〇〇一年）も参照。
- (6) 日比野丈夫「唐代蒲昌府文書の研究」（『東方学報』三三、一九六三年）。
- (7) これは、K・コーリー（神川信彦・池田清訳）『軍隊と革命の技術』（岩波書店、一九六一年）第十章に引用された軍事研究家トハチエフスキーの言葉である。こうした軍事学の視角については、下向井龍彦「日本律令軍制の基本構造」（『史学研究』一七五号、一九八七年）を参照。
- (8) 『文苑英華』卷四〇一、中書制詰、孫逖撰「授王斛斯兼左金吾衛大將軍制」。尚、本稿における史料の引用は、原則として、本文では書き下し文、註では原文とした。
- (9) 『唐六典』卷二四、諸衛、左右驍衛条に、「左右驍衛大將軍・將軍之職掌如左、右衛。」とある。
- (10) 註（1）浜口論文は、十二衛の中で金吾衛だけ以外の諸衛とは職掌が異なっており、「宮城、皇城及び長安城外の警察及び諸城門の門衛」を主任務とし、また他の諸衛が近衛師団の職任に近いのに対し、金吾衛は「皇宮警察、憲兵隊及び警視庁に概当」と述べている。従来の研究は基本的に浜口説を踏襲している。
- (11) 山田充昭「検非違使成立期前後の京中警備の実態」『日本史研究』四〇六、一九九八年）。
- (12) 『唐兩京城坊攷』卷三、四によれば、左金吾衛は永興坊に、右金吾衛は布政坊に所在していた。
- (13) 室永芳三「唐都長安城の坊制と治安機構（下）」（『九州大学東洋史論集』四、一九七五年）。
- (14) 『漢書』卷一九上、百官公卿表第七上、中尉条。執金吾については、浜口重国「兩漢の中央諸軍に就いて」（『秦漢隋唐史の研究』上巻、東京大学出版会、一九六六年、初出一九三九年）を参照。
- (15) 『唐六典』卷二五、諸衛府の標目は、金吾衛の職員と

して「左右街使各一人、判官二人、典二人。」を挙げている。

(16) 『新唐書』卷三九、百官志四上、金吾衛条に「左右街使、掌分察六街徼巡。」とある。

(17) 『唐六典』卷五、兵部、駕部郎中条注の開元二十五年勅に「扈從及街使乘直」と見える。

(18) 本記事の胡三省注に、「左右金吾掌選捕姦非。府縣、京兆府及兩赤縣。」とある。

(19) 楊鴻年「隋唐金吾之職掌」(『歴史研究』一九八三年第五期)。

(20) 楊鴻年『隋唐兩京考』(武漢大學出版社、二〇〇五年)「街官種種」の項。

(21) 軍事に関連する用語としての「水草」は飲料水と軍馬の牧草を指す(『呉子』治兵第三)。「水草」に関しては、『漢書』卷五五、霍去病伝に、「善水草處」を知っていた張騫が、軍を飢渴から救ったという記事がある。これを参照すれば、「水草所宜」とは、戦地で地形や地下水の所在地を把握し、飲料水・牧草等を確保する職務であろう。

(22) 『通典』は大業三年の改称を「左右武候衛」とするが、『隋書』卷二八、百官志下によれば「左右候衛」が正しい。(23) 唐令条文については、仁井田陞『唐令拾遺』(東方文

化学院、一九三三年、東京大学出版会復刊、一九六四年)及び仁井田陞著・池田温編集代表『唐令拾遺補』(東京大学出版会、一九九七年)に拠る。

(24) 註(23)『唐令拾遺』序説第二章。

(25) 先に、「金吾衛」という名称が漢代の「執金吾」に由来すると述べた。その執金吾について『漢書』卷一九上、百官公卿表第七上、中尉条の顔師古注は、

金吾、鳥名也。主辟不祥。天子出行、職主先導、以禦非常。故執此鳥之象、因以名官。

と述べ、「金吾」の名称は鳥名に由来し、不祥を辟け、天子出行の先導を掌る意だとしている。とすれば、金吾衛という名称は車駕の「先驅」を掌ることを示していると考えられる。

(26) K・クラウゼヴィッツ(篠田英雄訳)『戦争論』(岩波書店、一九六八年)第五篇の第六、七、八章。

(27) 八世紀半ば成立と見られる唐代の兵書。著者は李筌、本籍、生没年月は不詳。肅宗から代宗の治世下(七五六～七七九)の頃の人物と見られる。『太白陰経』のテキストは、『神機制敵太白陰経』(『百部叢書集成』原刻景印 嚴一萍選輯五二守山閣叢書、芸文印書館、一九六八年)に拠る。成立・概要に関しては、『四庫全書総目』(九)四庫提

要弁証(一)卷一一、子部二『太白陰経』及び、張文纁・王龍
 詠注『太白陰経全解』(岳麓書社、二〇〇四年)を参照。

(28) 菊池英夫「日唐軍制比較研究上の若干の問題」(唐代
 史研究会編『隋唐帝国と東アジア世界』汲古書院、一九七
 九年)。

(29) 孫繼民『唐代行軍制度研究』(文津出版社、一九九五
 年)第二、三章。

(30) 著者は李靖、京兆三原の人。唐初の名將として知られ、
 貞観二十三年、七十九歳で没す(『旧唐書』卷六七、李靖
 伝)。本稿では、『李靖兵法』逸文については煩瑣を避ける
 ため、基本的に『通典』に拠るが、輯本として汪宗沂輯
 『衛公兵法輯本』二卷(『百部叢書集成』原刻景印 敝一萍
 選輯七八、漸西村舎叢刊、芸文印書館、一九七〇年)があ
 り、参照した。註(28) 菊池論文は、『李靖兵法』として
 伝えられる引用文の中には、極めて具体的に行軍軍営の規
 則・法令をのべた部分があり、その中には当時の実際の法
 令をそのまま移したと思われる箇条も存すると指摘してい
 る。

(31) 唐代の行軍編成については、菊池英夫「節度使制確立
 以前における『軍』制度の展開(正・統)」(『東洋学報』
 四四―二・五四―一、一九六一年・一九六二年)、註(29)

孫著書第五、七章を参照。

(32) 『通典』卷一四八、兵一、立軍所引『李靖兵法』。

(33) 『通典』卷一四八、兵一、立軍、今制。

(34) 図録版『吐魯番出土文書』第参冊(文物出版社、一九
 九六年)三七二頁。本文書については、孫繼民『敦煌吐魯
 番所出唐代軍事文書初探』(中国社会科学出版社、二〇〇
 〇年)第三編において詳細な検討がなされている。孫氏は、
 本文書の作成年代は垂拱四年(六八八)か永昌元年(六八
 九)の可能性が高いと述べている。

(35) 註(34) 孫著書第三編は、「中軍左虞候」の下の欠損
 部に「軍」字の存在を想定する。

(36) 『唐大詔令集』卷一三〇、蕃夷所収。

(37) 『文苑英華』卷六四七、露布一所収。

(38) 虞候軍の任務については、菊池英夫「西域出土文書を
 通じてみたる唐玄宗時代における府兵制の運用(上)」
 (『東洋学報』五二―三、一九六九年)、註(29) 孫著書第
 九章でも検討がなされている。

(39) 行烽については、程喜森『漢唐烽堠制度研究』(三秦
 出版社、一九九〇年)第十二章参照。

(40) 註(27)『太白陰経全解』は、「捉」は「捉」の誤りと
 する。従うべき見解であろう。

(41) 『通典』卷一五二、兵五、守拒法所引『李靖兵法』には「每晨及夜平安、舉一火。」とある。「平安火」については、註(39) 程著書第十二章参照。

(42) 『大唐開元礼』卷二、序例中、大駕鹵簿には、「次金吾果毅二人、領虞候、飲飛四十八騎。」とあり、「虞候、飲飛」の名称が見える。「飲飛」とは金吾衛所属衛士の名称であり(『唐六典』卷五、兵部)、金吾衛が行幸時に「虞候」の任務を果たしていたことを示す。

(43) 『文館詞林』卷四五三、碑卅三、虞世南撰「左武侯將軍龐某碑序」。

(44) 『通典』卷一五二、兵五、守拒法所引『李靖兵法』、『太白陰経』卷五、遊奕地聽篇第四八。

(45) 菊池英夫「西域出土文書を通じてみたる唐玄宗時代における府兵制の運用(下)」(『東洋学報』五一—四、一九七〇年)。

(46) もう一つ留意すべきことは、京城内全部が金吾衛の管轄区域ではなかったことである。即ち、先掲『旧唐書』田仁会伝に「晝夜巡警し、宮城自り衛路に至る。」とあり、金吾衛の巡察は街路までであったと考えられる。また、『資治通鑑』卷三三九、元和十一年(八一六)十一月庚子条に、京兆尹柳公綽の言葉として「若死於街衢、金吾街使

當奏。在坊内、左右巡使當奏。」とあり、金吾街使の管轄は街路だけで、「坊」は左右巡使の管轄であった(註(13) 室永論文)。このことは、金吾衛の職掌である「道路」と関係しているのではなからうか。

(47) 既に註(19) 楊論文は、先掲『隋書』趙才伝・李子雄伝の記事を挙げ、武侯府の後身である金吾衛が行幸時の先驅・隊伍統制に当たっていたことを指摘している。但し、楊氏は武侯府・金吾衛と行軍制度における虞候軍との関係には触れていない。

(48) 『隋書』卷四三、觀德王雄伝に、「高祖爲丞相、……以功授柱國、雍州牧、仍領相府虞候。」とあり、楊堅の丞相府にも虞候が設置されていた。丞相府の虞候に関しては、王仲孳『北周六典』(中華書局、一九七九)卷一、大丞相第六も参照。

(49) 浜口重国「西魏の二十四軍と儀同府」(註(1) 浜口著書、初出一九三八・三九年)。

(50) 『統高僧伝』卷一九、釈法藏伝にも、宣帝大象元年九月下山、謁帝……武侯府上大夫拓王猛、次大夫乙婁謙問、從何而爲、朋儕何在、施主是誰。とあり、北周の大象元年(五七九)に武侯府の存在したことを伝える。

(51) 菊池英夫「唐初軍制用語としての「團」の用法―日本律令制下の「軍團」に触れて―(1)」(『中央大学文学部紀要』三九、一九九四年)。

(52) 『後漢書』卷七九上、儒林列伝第六九上の章懷太子注に「漢官儀曰、清道以旒頭爲前驅也。」とあり、「清道」は前驅(先驅)と関連する名称である。

(53) 『隋書』卷二八、百官志下に「左右虞候、各置開府一人、掌斥候伺非。」とある。

(54) 虞候府の名称は、唐初より龍朔二年までと神龍年間(七〇五―六)に使用された(『通典』卷三〇、職官一二、清道率府条)。

(55) 『通典』卷三〇、職官一二、清道率府条。

(56) 録文については、Tun-huang and Turfan Documents concerning Social and Economic History, I Legal texts (A) (B) 1978・80, The Toyo Bunko (山本達郎・池田温・岡野誠編)及び、岡野誠「唐永徽職員令の復元」S・一一四四六の剝離結果について―(島田正郎博士頌寿記念論集『東洋法史の探求』汲古書院、一九八七年)に拠る。

(57) 参考となる例として神策軍がある。神策軍は、本来は天宝十三載(七五四)に対吐蕃の前線、河源九曲(甘肅・青海省)に設置された辺境諸軍の一つであり、それが、安

史の乱を機に禁苑に屯するようになったものである(曾我部静雄「唐の南衙と北衙の南司と北司への推移」『史林』六四―一、一九八一年)。

(58) 『独断』巻上に「天子自謂曰行在所。猶言今雖在京師、行所至耳。」とあるような京師を行在所と見做す觀念を前提にすれば、長安を軍営と見做すことも可能であろう。『独断』については福井重雅編『訃注西京雜記・独断』(東方書店、二〇〇〇年)参照。

(59) 『唐六典』卷一三、御史台、監察御史条に「凡決囚徒、則與中書舍人・金吾將軍監之。」とあり、『通典』卷二六八、刑法六、考訊(『唐令拾遺補』獄官令復旧第九条(開元二十五年令)に「在京決死囚、皆令御史・金吾監決。」とあるように、京師における刑罰の執行には、金吾衛が深く関与していた。これは戦陣での軍令の執行と関連するものとして理解できると思うが、この問題については別の機会に改めて論じたい。尚、金吾衛の司法的な活動については註(19)楊論文が多くの事例を挙げている。

(60) 註(48)参照。

(61) 谷川道雄「府兵制国家と府兵制」(増補 隋唐帝国形成史論)筑摩書房、一九九八年、初出一九八六年)は、北周・隋・唐の諸政権の原形は国軍(府兵)の統帥府たる覇

府（丞相府）であり、当時の皇帝権は国軍の最高統帥権を自らのうちに吸収することによって、真に実質的なものとなった、と指摘する。

（62） 今村真介『王権の修辞学』（講談社、二〇〇四年）第

一章は、国家とは本来的に戦争機械であり、君主とは歴史的には先ず軍司令官として出現する、と指摘するが、その軍事権の表出の在り方に、各々の国家や王権の特性が表われるのだろう。